

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	熱淚（歌）：文苑
Author(s)	中村， 靜
Citation	龍南會雜誌， 1 4 6： 7 6 - 7 7
Issue date	1912-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6379
Right	

旅に出で、雨よひ空の川床に群るゝ鴉の羽音を聞きぬ
歌はんと思ひし男何時迄も歌はで人をいたくいらだつ
阿蘇の山小雨降る日は遠くより静寂の野を底鳴り渡る
黄色なる阿蘇の裾野に立つ人を烟の影の静かににる

逝く春の歌

は
じ
め

舷によりて霞の中に違がなるなづかしの人の家みる心
小雨ふるたぼろ月夜の大公孫樹もの思ふ子を夜鳥のなく
眠られずに家傳の藥つく槌の音聞きく夜半を春の雨ふる
「目よなごてひなげしこのむ」その花の紅なるがやがてしほめば」
春の夜の湯殿にけふるランプをばうるはしと見て瀨の音を聞く
蕨狩の歸さにふとも瀧見にと球磨川べりの林わけゆく

熱 涙

なほ熱き涙ながれぬ只茫と春の最中の帳のうちに

し
づ
か

消息もあらで淋しどものわべる同じ日記かく今日も昨日も
天がける白馬にめしてわが君の來ませりと見し明方の夢
わが弟紅人手見て渚邊を千鳥の如くこばしりてきぬ
あさまじうわが頬をまろぶわが涙それともわかす白蓮の花
忘れ給へ雨しとくど濡れし宵も加茂の夕もそのくりごとも
はかなごとかすかぎりなく云ひいでゝ御堂に泣きしそのはじめの日
つくづくと肘にもたれて欠伸しぬ茴香の葉に五月雨する日
夏はきぬ紫野ゆく旅人のためかしたる小さき扇に

春 野 晚 翠

首夏風 花ゆゑにうらみし風も夏きては吹くよとはかりいそぎまたるゝ
遠郭公 ほのかなる初音をもらす郭公いつくの雲のはてに鳴らん
里卯花 卯花の露の光もさしそひて月とも見ゆる玉川の里
水邊卯花 初瀬川きしうつ波とみゆるまで枝もたわゝに咲る卯の花
窓前竹 霜やたひたけともかれすいやましに生ひこそ茂れ窓の吳竹
朝 煙 家ごとに朝たく煙たちのほり竈にきはふ山もとのさど
浦 曙 眞帆かけて霞の浦をこく舟の波にきぬゆく春のあけほの